

1. 開催日時・場所

- 日時: 2026年5月21日(木) 10:32~11:36(64分17秒)
- 場所: デイサービス井福来

2. 出席者

- 事業者側:
 - W1(井福来統括・進行)
 - W2(法人全体責任者)
 - ※U(管理者)は急遽欠席
- 利用者家族:
 - K様(妻が利用・3回目の出席)
 - H様(90代の義母が利用・初出席)
 - N様(妻が利用)
- 地域・行政・専門職側:
 - S様(三島市錦田地区地域包括支援センター・社会福祉士)
 - I様(社会福祉士養成学校実習生)

3. 会議次第・要旨

① 開会・挨拶・趣旨説明

- 進行(W1 統括): 開会の挨拶とメンバー紹介。介護保険制度に基づき記録・保存を行う旨を説明。
- 法人責任者(W2): 運営推進会議の趣旨を説明。地域密着型サービスとして半年に1回(5月・11月)開催し、家族や地域(民生委員・町内会長等)の意見を取り入れて地域に根ざしたサービスを作る場であることを共有。市内3拠点(井福来、若芝、山風木)で連携している旨を報告。

② 事業所運営・稼働状況報告(法人責任者:渡部浩考)

- 施設概要: 定員12名の認知症対応型通所介護。令和6年6月に現在の建物に移転し、まもなく2周年を迎える。
- 稼働状況(4月時点): 土曜日に若干の空き(1枠)があるものの、全体として稼働率は90%を超えており、非常に安定して元気に通われている。

- **利用者の特徴：** 認知症メインの事業所であるため、身体的には元気で動ける「要介護1～2」の層が中心。
- **運営の現状と課題：**
 - **物価高騰の影響：** 消耗品(ゴム手袋、ゴミ袋など)の不足や物価高に直面しているが、工夫して乗り越える強いチーム作りを推進。
 - **人材育成：** 30代～40代の中核世代、若手職員の育成に注力している。
 - **多様なケースへの対応：** 認知症の独居高齢者(身寄りなし、遠方家族)、老老介護世帯の増加、家族間での温度差の橋渡しなど、ケースバイケースの課題に対し前向きに取り組んでいる。

③ 日常の様子・活動報告(プロジェクターによる写真紹介:渡部統括)

- **個別性を重視した過ごし方：** 男性利用者が増加傾向。画一的でない空間で、盆栽(庭園管理士資格保有者)など個人の趣味やこだわりを大切にしている。
- **活動紹介：**
 - **削り絵(スクラッチアート)：** 若手職員が見つめてきた活動。自宅に額縁で飾るほど熱中される方もいる。
 - **体操教室：** 月2回、外部講師を招き、職員だけでは引き出せない力強い動きを引き出している。
 - **100歳のお祝い：** 事業所で2人目となる100歳(女性)の利用者をお祝い。現在も歩行器や階段昇降ができるほど大変元気。
 - **天声人語の書き写し・絵手紙：** それぞれの習慣や特技を活かした個別活動。
 - **地域ボランティアとの交流：** 近隣住民からの申し出による大正琴ボランティア(月1回)や、ハーモニカバンド(全国大会優勝経験者)との合同演奏など、地域との相互作用が生まれている。
 - **外出レクリエーション：** 中里温水池公園(定番スポット)、松陰の梅祭りなどへ外出。
 - **いぶき喫茶：** 月1回、自分の意思で「飲みたいもの」「食べたいもの」を主張・選択してもらう取り組みを実施。
 - **三信ギャラリー(芝本町)の見学：** 市内事業所(若芝)の駐車場を活用し、街中の美術展へ車椅子等で鑑賞へ出かけている。
 - **役割と達成感：** 敷地内の畑や庭を活用し、現役農家だった利用者から若手職員への栽培技術の伝承(球根の干し方など)や、収穫したきゅうりのぬか漬け作りなど、「お仕事感」や役割を持てる演出を行っている。
 - **3事業所合同「ご当地企画」：** 47都道府県をテーマに、ご当地おやつ(例:静岡県のおなぎパイ)の取り寄せや連想ゲームなどを持ち回りで企画。

④ 認知症施策・当事者会議への参画報告(W1 統括)

- 新しい認知症観(認知症になってもやりたいことを行い、繋がりを持って自分らしく暮らし続けられる社会)について共有(85歳以上の2人に1人は認知症の時代)。
- 渡部統括が利用者・当事者の思いを代弁する形で「認知症当事者会議(ワークショップ)」に参画した内容を報告。
 - **当事者の声:**「受診や診断・治療開始にいたるまでが非常に大変だった」「診断を受けて安心した面もある」「三島市のケアパス(パンフレット)は、認知症になる前から存在を知っていれば心づもりができた」「誰かの役に立っていると思える時が嬉しい」等の意見を紹介。
- **三島市からの案内:** 6月6日に社会福祉協議会で開催される、認知症専門医(池田芝本町クリニック・池田先生)等によるパネルディスカッション(意見交換会)を紹介。職員の研修も兼ねて各事業所から参加予定。

4. 意見交換・家族の声

【利用者の変化・家族の工夫】

- **K様:**
 - 最近の工夫として、妻を「父さん・母さん」ではなく、昔のようにお互い名前で呼ぶようにした。自分たちの親(義父母)がまだ生きていと錯覚し、「さっきお母さん(義母)がいた」などと言い出すのを防ぐため。名前呼びに変えてから、少し雰囲気良くなった。
 - **現在の困りごと:** 車の助手席でシートベルトを「苦しい」「うざい」と外してしまう。
 - **今後の懸念:** 失禁や排泄面の対応は自分の中で苦にならないが、これからそれらが増えていくのだろうと感じている。一番苦勞するのは、こちらの言うことを理解してくれない(歯磨き等の声かけを拒否される)時。
 - **気分の波:** 調子が良い時は驚くほど会話が成り立つが、悪い時はキャッチボールにならず、全く別の話が返ってくる。
- **N様:**
 - 妻を介護中。非常に心配性で、自分が少しでもいなくなると「どこ行く、どこ行く」と何度も同じことを聞いてくる。感情の起伏が激しく、入れ歯を忘れて注意すると「そんなこと言われたくない、これで食べられる」と怒る日もあれば、別の日には「ありがとう」と素直に言う日もあり、被害者意識を持たれることもある。これが病気なのかと感じている。
 - **家族としての心構え:** 「自分の人生も大切にしないと、あっという間に終わってしまう。家内は家内として、自分も好きなことをやりながら生き様を示していきたい」と語る。

- 帰宅時、機嫌が良い時は「コーヒーを飲んだ」「みんなとこんな話をした」とよく覚えていて嬉しそうに話すが、日によってはさきまでデイサービスに行っていたこと自体を忘れてしまうこともある。
- **H 様:**
 - 義母が 10 年以上デイサービスにお世話になっており、非常に居心地が良く楽しく通えていることに感謝している。
 - **過去の課題:** 少し前まで被害妄想があり、話し始めると永遠と続く状態だった。同居する長男(主人)がそれを受け入れられず、お互いに感情的になり喧嘩になってしまうことがあった。嫁の立場としては、主人の気持ちも理解できるが、お母さんの状態を主人に相談すると怒ってしまうため、自分の中で抱え込んで整理していた。
 - 以前、同居していた時期は気を遣うことが多く、うちに来ると(義母の)お客さんのようになってしまう部分があった。現在は車で 5 分ほどの距離で、買い物と一緒に行くなど「程よい距離感」を保っていることが、10 年以上在宅生活を続けられている秘訣だと感じている。

【デイサービス井福来への評価】

- **N 様:** 職員の教育が非常に行き届いている。朝のお迎え時の言葉遣いや接し方がとても優しい。12~13 名という小規模な定員(戦略的規模)だからこそ、お客様に対してきめ細かく、目を行き届かせた対応ができています。大手の広いデイサービスに大勢で入れられて何が何だか分からなくなるような所とは全然違う。本当にありがたい環境。

【地域における認知症の公表と助け合いについて】

- **K 様からの質問:** 「近所の人に『最近奥さん見かけないね』と言われた際、オープンに『認知症になりましたね』と伝えて良いものか。地域での助け合いは必要だが、噂が広まってしまう怖さもあり、どう判断すべきか悩んでいる」
- **H 様:** 「義母が(被害妄想等で)『あの人が何かした』と思い込んでしまった時など、周囲にその気(認知症)があることを知っておいてほしい反面、伝えたことでどう思われるかという葛藤がある。しかし、言っておかないと後々トラブルになった時に困るという思いもある」
- **S 様(包括支援センター):**
 - 特定の個人を指さずに、地域全体で認知症を語れる場(居場所)の必要性を痛感した。公表すべきかどうかは「高血圧」のようにオープンに言える病気とは異なり、個人の価値観や重み、見られ方への抵抗感(家族としての見栄や悩み)があるため、一概に「言った方がいい」とは強制できない。
 - だからこそ、防災訓練や地域の寄り合い、サポーター養成講座などの機会を捉えて、地域住民が「私だったらどう思うか、どうするか」をふわっと、身近に学べる環境を包括としても作っていききたい。

- キュア(治療)からケア、そして共に生きる段階へ進む中、「介護マーク(介護中であることを示すワッペン等)」を身につけることで、周囲が優しくしてくれたり、車椅子での外出時に視野が広がったりと、家族側の心の抵抗感が薄れるきっかけになることもある。
- **進行(W1)**: 三島市内でも、地域(エリア)の年代構成やこれまでの関わりによって、認知症に対する受け止め方や雰囲気には地域差がある。現実的な対応としては、まずは「お隣さん、ご近所さん」など、信頼できる最小限の範囲に声をかけておくのが現実的ではないか。
- **法人責任者(W2)**: 近所の目による助け合いだけでなく、昨今は高齢者を狙った詐欺や強盗などの「防犯面」の観点からも、近隣との情報共有や、ダミーも含めた防犯カメラの設置などの重要性が増している。
 - ※送迎時に、利用者が危険な外壁塗装の契約(詐欺的な勧誘)をさせられそうになっている現場に職員が遭遇し、すぐに家族へ連絡して被害を防いだ事例を共有。

5. 閉会挨拶

- **法人責任者(W1)**: 家族の皆様からのリアルな生の声、葛藤を伺うことができ、大変有意義な会議となった。この内容を現場の職員全員で共有し、さらにワンランク上のケアができるようチーム一丸となって取り組んでいく。次回の運営推進会議(約半年後)への協力をお願いし、閉会とした。